

## 日本学の旅—日仏間「対話と深化」を振り返って

### ロール・シュワルツ＝アレナレス (お茶の水女子大学 助教授)

お茶の水女子大学比較日本学研究センターは、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムの一環として、2006年3月24日と25日にパリで、29日にクレルモン・フェランで、フランスの権威ある研究所や大学と共同で二つの国際シンポジウムを行った。これらのシンポジウムは、その新しさ、規模、発表の質、そしてそこで結ばれた学術的な交流関係から、比較日本学研究センターだけでなく、お茶の水女子大学の国際交流の歴史においても、非常に重要な出来事となったのではないかと思う。

#### I. シンポジウム開催の発端と動機

シンポジウムの経緯を振り返るにあたり、まず比較日本学研究センターの使命をここに確認したい。今回のシンポジウムの構想は、当センターの掲げる目標から直接的に生まれたものである。本校に2004年4月に開設された、複数の学問分野にまたがるこの研究センターは、すでに15名ほどの研究員を擁し、日本学という分野における国際的な交流ネットワークを形成することを目的としており、世界中の研究拠点と接点を持ちながら、共同研究プロジェクトの実現と、情報の収集・発信に努めている。

2004年7月より、この新設のセンターの唯一の専任助教授として初めて迎えられた者として、私がまず目標に掲げたことは、センターの存在を早急に広め、スケールの大きいプロジェクトを通して、多分野にまたがる研究グループとしての統一性と方向性を確立することであった。こうした思いから、当時のセンター所長であった高島元洋先生と協議したうえで、2005年3月にこの二つのシンポジウムの構想が生まれた。そこで掲げた目標とテーマは、外国における日本学の受容と伝達の問題、そして比較研究的な方法論に焦点をあてるものとなった。また一方で、シンポジウム開催地であるフランス、そして広くヨーロッパは、日本学と哲学の分野では非常に古く豊かな伝統を誇り、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムの特色である「対話と深化」を追求することが可能な土壌であったといえる。

2005年秋にこのプログラムから支給された研究費によって、このプロジェクトは実現されることとなり、当初予定されていた参加者に更に5人の大学院生が加わり、シンポジウムは非常に意義深いものとなった。

#### II. 二つのシンポジウムの特色

## パリ：フランス人日本学者との交流

パリで1日半かけて行われた最初のシンポジウムは、比較日本学研究センターをフランスにおける日本学の代表的な研究機関に紹介することを主な目的とし、コレージュ・ド・フランスに在籍する日本学者チームと事前にコンタクトをとったところ、シンポジウムの共同開催の承諾を得るに至った。フランス国立科学研究センター (CNRS) や、パリ第7大学日本学科日本社会科学・人文科学研究グループ (GREJA)、フランス極東学院 (EFEO)、フランス国立社会科学研究院 (EHESS)、フランス国立東洋語・東洋文化研究院 (INALCO)、そしてヨーロッパ、日本の大学など、非常に多くの組織に所属する研究者で構成されるこのチームは、日本学の中でも歴史、文学、宗教、思想、社会科学、美術史など多領域に渡る研究を行っており、また日本研究者や博士課程の学生の交流と討論の場を提供することにも重点を置いている。

「18世紀～19世紀、江戸から東京へ：都市文化の構築と表象」という我々のセンターが掲げたテーマは、その内容の幅の広さ、今日性、そして文学、歴史、社会、芸術といった多領域にまたがるアプローチから、シンポジウムのフランス人側の共催者の期待と問題提起に一致するものであった。ヨーロッパの日本学の中でもとりわけ活発な江戸文化、明治期の変動についての研究、また数年前から取り上げられるようになった日本の都市の問題に関する考察は、フランスでも絶えず発展し続けており、今日では厳密な日本学という範囲を超えて関心と呼んでいる。

今年3月の全国的な学生デモによってフランスの大学は大いに混乱していたにも関わらず、コレージュ・ド・フランスの講義室で行われたこのシンポジウムに多くの聴講者が訪れたことは、フランス人のそうした日本に対する関心をよく示しているといえる。

#### クレルモン・フェラン：対話—普遍的価値を求めて—

3月29日にクレルモン・フェランで行われたシンポジウム「哲学・倫理・宗教思想—日本とフランス：交錯する視点—」は、比較日本学研究センターの基盤でもある比較方法論を試すことを目的に行われた。

その意味では、シンポジウムの共催者であるブレーズ・パスカル大学哲学・合理性研究センター (PHIER) の研究者らは、我々のセンターにとってまずなにより“対話者”であった。クレルモン・フェラン人間科学研究所に拠点を置くPHIERは、その目的、活発な研究活動、比較哲学という分野における国際的な認知により、7年前から知・科学哲学、論理・言語哲学、システムの歴史、実用的合理性といった分野において、合理性の研究プログラムを展開し、比較研究でもって哲学史と最先端の哲学に関する考察を行ってき

た研究チームである。主にブレーズ・パスカル大学哲学科のメンバーで構成されるが、多くの客員研究員も擁し、比較哲学に焦点を当てた大学間の協力関係をフランス内外においてすでに発展させている。

真の知的冒険であったこのシンポジウムは、日本思想と西洋哲学の間の初めての徹底した比較論的な対話の試みとなり、共催者双方にとって非常に有意義なものとなった。日本、西洋の哲学史における主要な作家の倫理的、宗教的作品を取り上げながら、発表者はそれぞれの専門分野を通して、人間の行動、言語、神の表象、神秘体験といったものにまつわる概念に関する一般的なテーマを浮き彫りにした。長い間、日本思想に対する非発展的な言説を支えてきた初歩的なオリエンタリズムとは反対に、参加者らは西洋と日本の概念が対話を通していかに普遍的な価値感の創造に協力していけるかを模索した。また、数十年前からフランスの日本学者は宗教史と日本思想の研究において重要な位置を占めてきたが、比較哲学という異なる学問領域においてこの度行われたシンポジウムは、扱われた内容、紡がれた交流からも、全く革新的な展望を切り開いたといえる。

### Ⅲ. シンポジウムに向けた戦略とその成果

この二つのシンポジウムの成功は、準備段階において決定された以下のような様々な方針によるところが大きいように思われる。

#### 1. 参加型の国際討論の呼びかけ

昨年この二つのシンポジウムの準備が始まったとき、共催者側にロジスティックな面でのパートナーとしてだけではなく、出来る限りシンポジウムでの発言者として積極的に参加をしてもらいたいという提案をした。つまり、単にフランスへ移動して聴講者の前で研究発表をするのではなく、優秀な研究者らにシンポジウムのテーマに関する研究を発表してもらい、またセッションの進行役をお願いしたり、あるいは討論会を開催してもらい、“対話”を実現させようという計画である。その結果、ヨーロッパ側からは12人の研究者がこの二つのシンポジウムに参加した。

#### 2. 翻訳・通訳

発表者全員の原稿を事前に翻訳したこと、そして討論の際の通訳も、今回のシンポジウムの成功にとっても今後の展開にとっても不可欠の役割を果たした。こうした選択は、「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムによる資金援助なしには実現しえなかった。日本側は頼住光子先生、フランス側は現在東京大学に在籍している INALCO の日本文学博士課程の学生、イヴリンヌ・ルシーニョ＝オドリ氏と私自身が翻訳のコーディネートを担当し、シンポジウムの際に聴講者や発表者に翻訳された原稿全てを配布

することができた。また、現在日本文化研究所（京都）に在籍している INALCO 博士課程のマティアス・アイェク氏には、見事な通訳をしていただいた。

#### 3. その他の文化活動

シンポジウムと平行して、日本側の参加者にそれぞれの専門やセンターの目的に関連した文化活動を提案した。パリでは、コレージュ・ド・フランス附属図書館、フランス国立図書館の東洋写本部門、国立東洋美術館を訪問した。クレルモン・フェランでのシンポジウム終了後は、ブレーズ・パスカル大学に属するフランス人メンバー数人と共に、その地方の見事なロマネスク教会や、ルネッサンス時代に建設されたメイアン城を訪れた。

パリ、中世の面影が残るオーヴェルニュ地方、美しいベリー地方での訪問、文化活動により、日本人参加者らはフランスで行われている研究、とりわけ日本学の研究を特色付ける文化的、歴史的背景、そしてそれを支える研究ツールと研究施設をより深く理解することができ、またフランス人の研究者らとの親睦を深めることにもなった。

### 結び

「魅力ある大学院教育イニシアティブ」プログラムの支援を得て開催された二つの大きなシンポジウムによって、お茶の水女子大学比較日本学研究センターは、ヨーロッパにおいて学術的にも制度的にも認知され、センターの研究員による更なる野心的な国際共同プロジェクトを構想することが可能となった。大学間の交流、協定締結の見通しも具体化し、本学とパリ第7大学およびブレーズ・パスカル大学で現在その検討が進められている。

多くの日本人及びフランス人日本学研究者が、シンポジウムの発表者として、あるいは通訳者や発表原稿の翻訳者として参加したことで、比較日本学研究センターの存在とその目的を効率的に広めることができた。また、原稿の事前の翻訳により、このシンポジウム議事録の出版準備も迅速に進めることができた。現在、共同研究の計画がコレージュ・ド・フランスの研究者らと共に検討されている。クレルモン・フェランでのシンポジウムの発表者は全員、すでに客員研究員として当センターに関わり、共同研究計画は実行に移されつつある。並行して日本側の参加者も、ブレーズ・パスカル大学哲学・合理性研究センターの客員研究員として声が掛かっているところである。

お茶の水女子大学とセンターの研究員が、今回の成果を長期にわたって熟成させ、日本においても海外においても、このまたとない出会いの場から生まれた期待と要求に応えていけるよう、そのために必要な人的、経済的資源を有することができるようになることを願ってやまない。